SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

旧制静岡高等学校関係資料の整理および公開に向けた基礎的作業(2014年度)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健, 岩井, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008141

旧制静岡高等学校関係資料の整理および公開に向けた基礎的作業(2014年度)

戸部　健・岩井　淳

はじめに

静岡大学人文社会科学部大学アーカイヴズプロジェクトでは、静岡大学人文社会科学部所蔵の旧制静岡高等学校および静岡大学文理学部・人文学部関係資料の整理・公開に向けた作業に2009年度より取り組んでいる[1]。

今年度のプロジェクトにおける主な活動内容は、(1)旧制静岡高等学校関係のガラス乾板の現像、(2)現像した写真の整理、(3)資料の展示、(4)県外のアーカイヴズへの訪問、などであった。その具体的な動きについて以下で紹介する。

1．2014年度の活動

(1)旧制静岡高等学校関係のガラス乾板の現像

一昨年度以来、人文社会科学部資料室に保管されている旧制静高関係のガラス乾板の現像を、静岡市内の写真業者に委託して実施している。ガラス乾板はそれぞれ数十枚ずつに分けられて箱に入れられており、そうした箱は現在確認されているだけで95箱ある[2]。昨年度までに約60箱分のガラス乾板を現像したが、今年度の作業で残ったほぼすべての乾板を現像することができた。現在ガラス乾板を現像できる写真店は限られており、そうした店舗でも現像に係る費用はいささか高額になっている。それゆえ、この3年ほどの間、本プロジェクトでは予算の大半を現像代に割かなければならなかった。ただ、苦労してそれを行ったことで、写真の整理、保存、公開がしやすくなったことも確かである。従って、次年度以降は公開に向けた整理作業に全力を傾けていきたい。

(2)現像した写真の整理

(1)で現像した写真の整理に今年度から取り組み始めた。具体的な作業は以下のとおりである。

①現像した写真をスキャニング(600dpi)して画像データを作成する。ガラス乾板が入っていた箱ごとにフォルダを作り、それらに画像データを個別に保存する。

②ガラス乾板の入っていた箱上の記載や、現像した写真などから、写真が撮影された日時、場所、イ

---

[1] これまでの活動内容については、下記を参照いただきたい。戸部健「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告」『地域研究』創刊号、2010年。戸部健「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2010年度)」『地域研究』第2号、2011年。戸部健・小二田誠二・岩井淳「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2011年度)」『地域研究』第3号、2012年。戸部健・橋本誠一・岩井淳「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2012年度)」『地域研究』第4号、2013年。戸部健・岩井淳・今村直樹「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2013年度)」『地域研究』第5号、2014年。

[2] 詳細は前掲「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2013年度)」の附録1を参照のこと。

ベント名などを読取り、写真台帳（ワードで作成）に入力する。さらに、スキャニングした画像データを写真台帳にサムネイルとして添付する（モデルは**附録１**を参照のこと）。

③写真台帳のデータを利用してキャプションを作成し、それを現像した写真とともにクリアファイルに入れる。

以上の作業を通して、現像写真が収納された永久保存用の写真帳と、検索に便利な写真台帳を作成した。学生アルバイトに手伝ってもらいながら、今年度に全体の約半数の写真を整理した。次年度には完成できるよう努力していきたい。今後は、大学広報などで役立ててもらうため、手始めに写真台帳を学内で公開するなど、資料を多くの人に利用してもらうような方途を模索していく予定である。

（３）資料の展示

昨年度に引き続き、今年度も人文社会科学部Ａ棟玄関において資料の展示を行った。各展示のテーマと内容は以下のとおりである。

①「戦争と旧制静岡高等学校（２）」

展示期間：2014 年 2 月～2014 年 7 月

展示内容：昭和天皇行幸および当時の学生生活に関する文書資料（「教育勅語」、「紀元二千六百年ニ際シ賜ハリタル詔書」、「昭和五年・一九年行幸台臨一件」、「行幸記念写真帖」、「仰秀寮落書き集」）

②「旧制静岡高校のスポーツ活動」

展示期間：2014 年 7 月～2015 年 3 月（予定）

展示内容：運動部の活動に関する資料（「優勝杯近県中等学校競技大会」、「優勝杯春秋杯」、「第二回全国高校野球大会寄せ書き」、「柔道部道場日誌」）

今後展示するテーマとしては、「旧制静岡高校の文芸活動」、「仰秀寮の歩み（２）」、「旧制静岡高等学校の廃校と人文学部への移行」などを予定している。

（４）県外のアーカイヴズへの訪問

昨年度は、地方の国立大学での事例を学ぶために金沢大学資料館、広島大学文書館などを訪問した。今年度もさらに多くの事例を見るため、篠原和大と戸部健が愛媛大学ミュージアムを、岩井淳が茨城大学五浦美術文化研究所を訪問した。各施設での調査の詳細については、巻末の**附録２**を参照いただきたい。

２．今後の課題

今年度の成果を踏まえて、来年度取り組むべきは以下の３点である。

（１）旧制静岡高等学校関係の文書資料の整理

旧制静岡高等学校関係の文書資料の整理については、近年作業の力点がガラス乾板の現像・整理に集

中していたため、実際あまり進展していない。写真の整理作業の進捗状況を見ながら早い時期に作業を再開できるようにしたい。

（2）ガラス乾板の整理

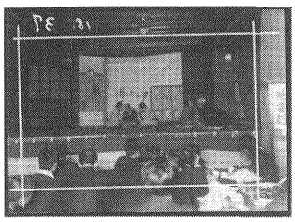
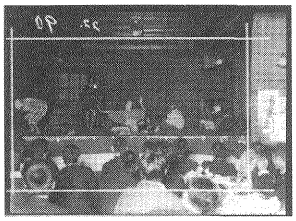
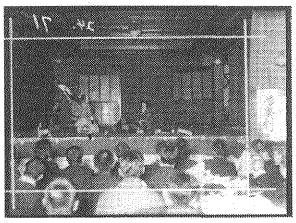
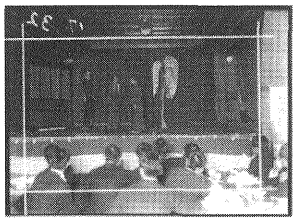
今年度でガラス乾板の大半を現像することができた。次年度以降それらを早急に整理した上で、公開に向けた取り組みをしていきたい。学内での公開については比較的容易だが、学外に公開するにはそのための具体的な方法や規則などについて考えていかなければならない。肖像権や著作権などクリアすべき問題について、今後法学の専門家も交えて議論していきたい。

（3）展示の入れ替え

スケジュールに基づいて、次年度以降も展示を続けていく。また、昨年度から始まっているキャンパスミュージアムでの大学史展示ともうまく連携しながら作業を進めていきたい。

（戸部　健）

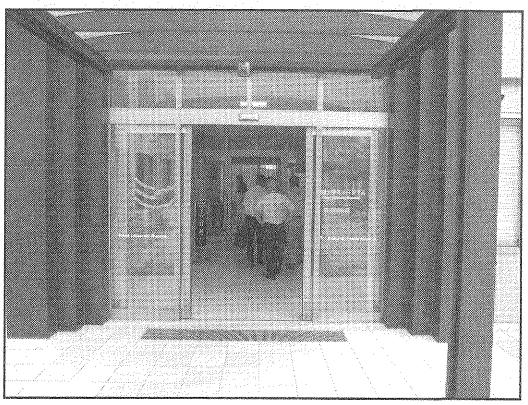
（附録１）旧制静岡高等学校関係ガラス乾板資料写真台帳（モデル）

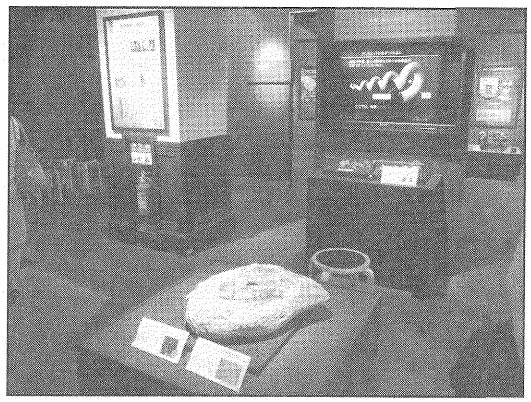
整理番号	枝番１（箱番号）	枝番２（写真番号）	所蔵場所	資料名	年代		備考（サムネイル）
					和暦	西暦	
49	8	1	旗など	写真（寮祭・町ストーム）	昭和10年10月27日	1935年10月27日	
49	8	2	旗など	写真（寮祭・町ストーム）	昭和10年10月27日	1935年10月27日	
49	8	3	旗など	写真（寮祭・町ストーム）	昭和10年10月27日	1935年10月27日	
49	8	4	旗など	写真（寮祭・町ストーム）	昭和10年10月27日	1935年10月27日	

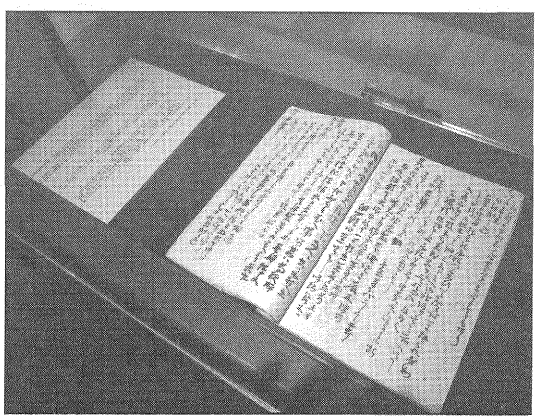
（附録２） 各大学アーカイヴズ調査報告資料

愛媛大学ミュージアム
住　　所：愛媛県松山市文京町３　愛媛大学城北キャンパス
開館時間：10:00～16:30
休 館 日：火曜日・その他（年末年始・センターおよび入学試験日・メンテナンス休館・臨時休館）
入 場 料：無料
ウェブサイト：http://www.museum.ehime-u.ac.jp/index.php

大学博物館等協議会2014年度大会および第9回博物科学会が2014年6月19日から20日まで愛媛大学にて開催され、静岡大学キャンパスミュージアムの代表として篠原和大と戸部健が参加した。愛媛大学には、「愛媛大学ミュージアム」という、地方国立大学が運営するものとしては最大規模の大学ミュージアムがあり、大学博物館等協議会および博物科学会の大会においても、そこでの試みについて当館教員からいくつかの報告がなされた。また、6月20日のお昼休みに、当館教員と学生スタッフによるミュージアムの案内もなされた（時間が短かったので、翌日篠原と戸部とで独自に再度じっくり見学した）。今回の愛媛出張の用務は主に本学キャンパスミュージアムに関するものであったが、そこで得た知見は人文社会科学部大学アーカイヴズプロジェクトとも関係が深い事柄であるため、以下で簡単に紹介したい。


愛媛大学ミュージアム入口


常設展示室の様子（古生物）

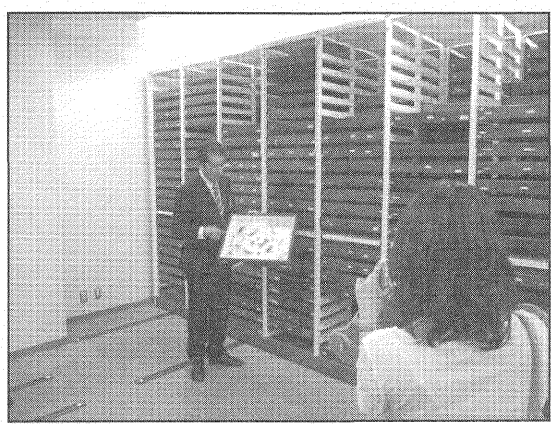

三輪田米山の日記

愛媛大学ミュージアムは、2009年11月に開館した。開館に際しては、前任および現任の学長（それぞれ岩石学と生態学を専攻）の後押しが強かったと言われている。建物は旧共通教育棟本館の１階部分の一部を使用しており、エントランスホール・常設展示室・企画展示室（多目的ホール）・昆虫標本収蔵展示室・水生生物展示（附属高校理科部との合同企画）・ミュージアムカフェ・中庭などで構成されている。

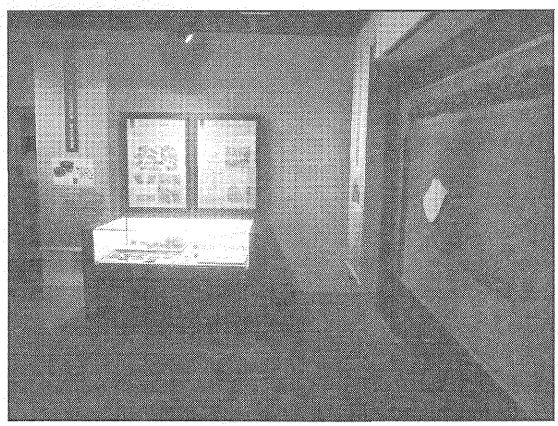
エントランスホールには、愛媛大学と前身校との関係を示す系図パネルや各種模型などが展示されている。「卒業アルバム検索システム」のようなものが入った端末も設置されていたが、詳細は不明である。

常設展示室は、「進化する宇宙と地球」（岩石・鉱物・古生物・地球深部・宇宙進化）・「愛媛の歴史と文化」（書聖三輪田米山の書や日記など）・「生命の多様性」（環境科学・昆虫・生命科学工学）・「人間の営み」（文京遺跡・古代鉄文化）の４つのテーマに分かれている。

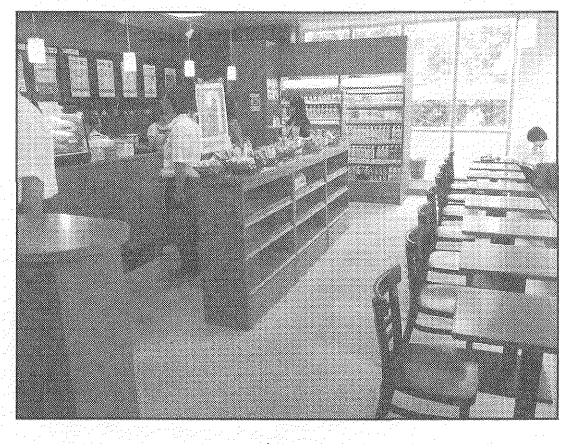
資料実物の展示がメインだが、ところどころにパネルや映像ディスプレイが配され、より具体的に学べるようになっていた。ただ、当館の展示をマネージメントされている徳田明仁氏によると、情報の詰め込みすぎによる弊害を意識して、パネルに盛り込む文字数は極限まで抑えているという（大会講演「愛媛大学ミュージアムの“みせ方・考え方”」より）。他方、教員を紹介した顔写真入りのパネルのなかには「剛腕の勝負師　田辺信介」や「永遠の自由人　遠藤弥重太」、「鉄研究の伝道師　村上恭通」のように、キャッチフレーズが付けられているものがあり、興味を引いた。



昆虫標本展示室



文京遺跡についての展示



ミュージアムカフェ

特別展示のテーマは、「中生代の生物世界展」であった。パネルとしても使用されている垂れ幕で企画展示室を区切ることで、スペースを有効に利用していた。また、自分で色を塗った恐竜の絵をカメラにかざすとその恐竜がテレビ画面の中で動き出す、というような子どもが喜びそうなコーナーもあった。

以上に加えて圧巻だったのが昆虫標本展示室である。普段は関係者以外入室禁止ということだが、大会参加者ということで入室することができた。室内には世界各地で採集されてきた昆虫の標本が入ったドイツ箱が整然と収蔵されていた。標本点数は実に 120 万点を超え、日本トップクラスの規模を誇る。これらの標本の一部は毎年夏に開催される昆虫展でも展示され、人気を博しているという。

当館の運営体制についても触れたい。大会において柳澤康信愛媛大学学長よりなされた特別講演によれば、当館は館長（中国文学専攻）以下、4 名の常勤教員（昆虫学・考古学・展示学）と 2 名の事務職員、および 15 名の学生スタッフで運営されているという。学生スタッフについては、大会における吉田広氏による報告（「愛媛大学ミュージアム業務を通じた学生スタッフへの教育効果」）で詳しく論じられていた。それによると、学生スタッフはすべて有期契約職員であり、各人週に 1 日程度出勤し、受付・案内・展示解説・清掃・展示空間のメンテナンス・開館閉館などの業務を行なうという。今回、我々がミュージアムを参観した際、案内および展示解説全般をしてくれたのもやはり学生スタッフだった。こうした運営形態は、ミュージアムの安定的な運営に対してだけでなく、学生教育にとっても有益であると考えられる。

以上、愛媛大学ミュージアムについて簡単に紹介した。旧帝大系の大学博物館の規模がますます大きくなるなか、愛媛大学ミュージアムの奮闘は、地方国立大学で資料保存・展示に関わる人たちに希望を与えるものである。予算が限られたなかで、興味深い展示をいかに長期間に亘って、かつ観客を飽きさ

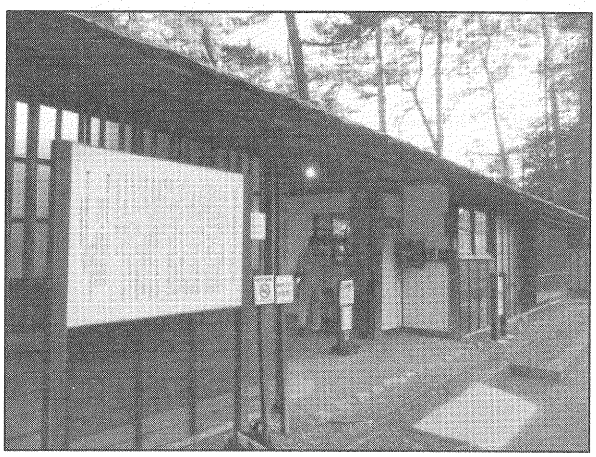
せず続けていくか、そのための工夫がミュージアム内の随所に見られた。大学史関係の資料保存・展示についての動きがあまり活発でないのは残念だったが、資料の展示方法や学生との協力体制のあり方など学ぶべき点が多かった。今後も同館の動きに注目していきたい。

（2014 年 6 月 20～22 日調査、2014 年 6 月 24 日記、戸部　健）

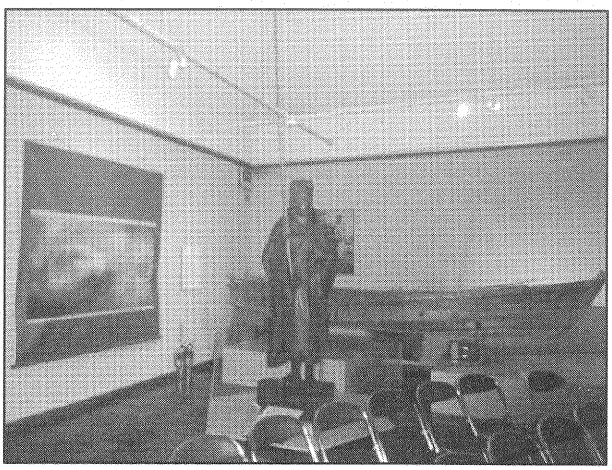
茨城大学五浦美術文化研究所
住所：北茨城市大津町五浦 727―2
ウェブサイト：http://rokkakudo.izura.ibaraki.ac.jp
開館時間：4 月から 9 月まで　8:30～17:30
　　10 月、2 月、3 月　8:30～17:00
　　11 月から 1 月まで　8:30～16:30
休館日：月曜日　年末年始
入場料：300 円

茨城大学五浦美術文化研究所を紹介する時、明治期の美術指導者でアジア主義者として知られる岡倉天心(1862-1913 年)の名を忘れることはできない。天心は、1903 年、北茨城・五浦(いずら)の地に居を構え、05 年に自らの設計によって、現在、五浦美術文化研究所がある場所に邸宅と六角堂を建設した。この経緯から五浦美術文化研究所は「天心遺跡」とも呼ばれている。

天心はこの地を拠点としたが、彼の死後、1942 年に天心偉績顕彰会が遺族からこの地の管理を引き継いだ。その後、1955 年に至り、天心遺跡は茨城大学に寄贈され、同年、五浦美術研究所(後に五浦美術文化研究所と改称)が設立されて、今に至っている。現在は、受付と管理を担当する二人の茨城大学職員が常駐している。


茨城大学五浦美術文化研究所の入口となる長屋門

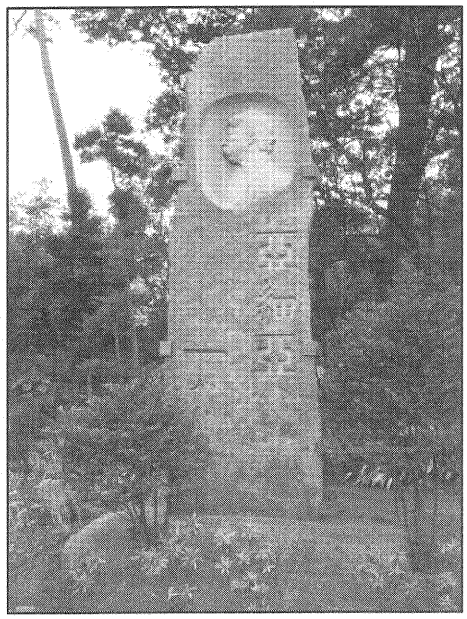
天心遺跡は、海に向かってそびえる崖の上にある。海から離れたところに①長屋門があり、その近くに②天心記念館がある。やや下った平地に③天心邸があり、崖を下りて海に面したところに④六角堂が立っている。順番に紹介すると、①の長屋門は、百年あまり前の建物で、現在は五浦美術文化研究所の受付・管理室として使用されている(写真参照)。


天心記念館の様子

②の天心記念館は、やや老朽化しているが、釣り姿の天心像などが展示されており、シアターホールの役割も果たしている(写真参照)。③の天心邸は、当初、料亭の古材を用いて建築されたと伝えられ、現在は和風の母屋が残されている。その脇には、1942 年に天心偉績顕彰会のメンバーによって建立さ

れた「亜細亜ハ一なり」の石碑がある(写真参照)。

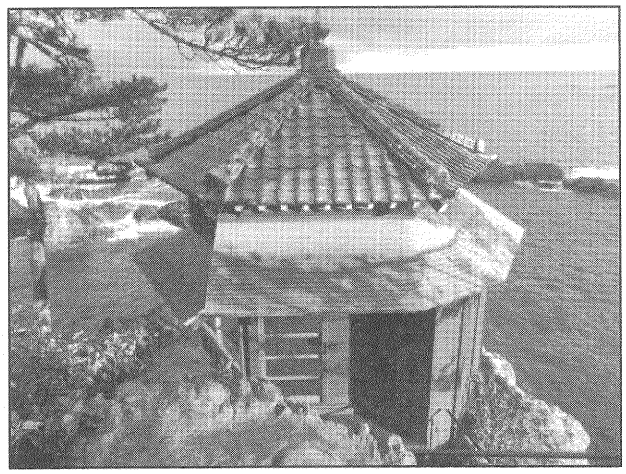
天心邸のある平地から海に向かって降りていくと、やがて④六角堂が現れる。この六角堂は、創建当初のものではなく、近年再建されたものである。なぜなら、2011年3月11日の東日本大震災による大津波によって、元の六角堂が流失したからである。五浦美術文化研究所は、地元では通称「六角堂」と呼ばれており、六角堂あっての研究所である。これを考えると、喪失のショックは計り知れなかっただろう。受付の方のお話しを伺ったところ、震災当日、何人かの見学者がいたものの、ほとんどは天心記念館にいて無事だったこと、見学者が避難した後で海の方に近づくと、すでに六角堂は7メートルを越えると言われる大津波に飲み込まれた後で、跡形もなかったことをお聞きできた。津波は六角堂を襲っただけでなく、天心邸のある平地まで押し寄せ、建物の床下まで到達したとのことであった。



「亜細亜ハ一なり」の石碑

五浦美術文化研究所は、天心遺跡のシンボルとも言える六角堂を失ってしまったが、2011年5月には茨城大学を中心に、茨城県や北茨城市、日本ナショナルトラスト、五浦日本美術院岡倉天心偉績顕彰会が協力して、復興プロジェクトが動き出した(この経緯については、茨城大学学術企画部が出している小冊子『天心・六角堂復興プロジェクト』が参考になる)。地域との連携が実を結び、流失から約一年をへて六角堂は再建され、2012年4月17日に竣工式が執り行われた。その方針は、「創建時の建築を復元する」というものであった。

私が訪問した2014年12月5日は、時折雨雲のかかる寒い日であったが、雲が去ってから陽光を受けて屹立する新生の六角堂は見事であった(写真参照)。ガラス窓からは六角堂の内部を見ることができ、茶室の向うには太平洋を望むことができた。この太平洋から7メートルを越える大津波が襲ってきたとは想像もつかないが、それが現実である。再建叶った六角堂を眺めていると、関わった多くの方々の想いが伝わってきた。六角堂は、天心遺跡のシンボルというだけでなく、大震災からの復興のシンボルとなったのである。その意味で、天心遺跡は歴史遺産というだけでなく、震災の乗り越え方を伝える貴重な現代の文化遺産でもある。もちろん、茨城県や東北地方の震災被害は甚大であり、決して克服されたとは言えないが、それでも六角堂の再建は重要な意味をもつだろう。



再建された六角堂

五浦美術文化研究所を擁する茨城大学は、地域と提携しながら、六角堂再建という困難な事業に取り組み、これを見事に成し遂げた。同じく、震災による被害が予想される静岡地域においても、静岡大学の果たすべき役割は小さくないと考えた次第である。

(2014年12月5日調査、2015年1月5日記、岩井　淳)